様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３５３０８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３１０６

研究課題名（和文）切れ目ない子育て支援：フィンランドのネウボラからの示唆

研究課題名（英文）Continuous support for child-rearing: implications from the Finnish neuvola system

研究代表者
高橋　睦子（TAKAHASHI, Mutsuko）

吉備国際大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：５０３２０４３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、親子ら自身の目線に立った「切れ目ない」子育て支援について考察した。フィンランドのネウボラ（助言の場）は市町村自治体が運営し、妊娠初期から定期的な面談と健診を同一の専門職（保健師ら）が担当し、直接の対話から利用者との信頼を培う。ネウボラはすべての子育て家族とつながる「出産・子どもネウボラ」と、特定のリスクや課題への早期対応を担う家族ネウボラとに大別される、近年はファミリーセンターとして再編され敷居の低い支援を探求している。支援の担当部署間の連携だけでなく、対話を通じて子育て家族本人たちが整合性と一貫性を実感でき、個別の家族が必要な時に必要な支援につながることが虐待防止にも効果的である。

研究成果の概要（英文）：This research studies the coherent and continuous support for parenting and childcare from viewpoints of families themselves. In Finland the maternity and baby clinics NEUVOLA, integrated model of maternity health and childcare supports, are run by municipalities for decades, providing all the parents and children with coherent and continuous support. The main implications from the Finnish neuvola system are 1) family-centeredness is essential for improving the quality of available support, and 2) dialogical relationships between clients and professionals are protective factors for preventing parents from risks of being committed to child maltreatment and/or abuse. In Finland the universal basic support for all the child-rearing families and the second phase for early prevention are being more integrated in the form of family center. In conclusion, the Japanese support system is to be reviewed and improved by taking into consideration the positive impacts of dialogical relationships.

研究分野：福祉政策論

キーワード：家族福祉　子育て支援　フィンランド

１．研究開始当初の背景
日本では少子化「危機」とともに子ども虐待への問題意識および社会的関心が高まっている一方、いずれの課題についても有効な政策対応が十分に達成されていない状況がある。整合性と一貫性のある「切れ目ない支援」を実現するための仕組みの模索において、日本の政府関係者や行政・民間の子育て支援者らがフィンランドの「ネウボラ」(アドバイスの場)に関心を寄せるようになっている。「ネウボラ」の出発点は、1920 年代初頭、母子保健の問題に自主的に取り組み始めた民間グループ（小児科医、保健・助産師等）の創意工夫であり、その効果が認められ制度化に至ったのは約 20 年後、1944 年であった。80 年余りにおよぶネウボラの形成と展開について、本研究開始時には、日本での本格的な研究は端緒についたばかりであった。

２．研究の目的
日本の子育て支援における「切れ目ない支援」実現に資する研究成果を得ることを念頭に、本研究では、(1)日本の子育て支援、とくに、妊娠期から就学前の時期での実際の支援の課題を再検討し、(2) フィランドのネウボラの制度化の歴史的推移（民間団体の取り組みの特性と、制度化に至る過程での「下から上へ」のはたらきかけのダイナミクス）と現状を明らかにし、(3) 日本において、少子化危機の克服（マクロレベルでの経済社会の持続可能性の課題）と児童虐待の予防（ミクロレベルでの子どもと家族関係の健全な発達の確保）に効果的に政策対応するため、ニューガバナンス（メゾレベル：地域社会・民間セクターと行政との新たな協力関係）の可能性と課題を考察する。

３．研究の方法
研究目的を達成するために、本研究は次のような手順と方法によって実施する。(1)日本における「切れ目ない」子育て支援の阻害要因・課題の整理（子育て支援の「切れ目」の解明のための実地調査と文献研究）、(2) フィンランドのネウボラの特性を把握し、ネウボラのエッセンスの日本への応用の可能性と課題の考察（フィンランドでのフィールドワーク（政策担当者や乳幼児医療保健の研究者へのインタビュー等）、および(3) 妊娠・出産から就学前の時期における日本の子育て支援の現状と課題の再検討（当事者（子育て家族）や地域の民間組織の活動についての参与観察）。
　このような研究手法から、「切れ目ない支援」の制度化に至っているフィンランドでのネウボラ（地域拠点かつ制度そのもの）の形成過程と活動状況について日本との照合を通じて理解を深め、日本の多様な地域特性をふまえつつ、子育て家族のための「切れ目ない支援」の実現に向けての政策提言を行う。

４．研究成果
初年度(H27 年度)は、国内の母子保健・地域保健（地方自治体行政）関係者や地域で子育て支援活動に取り組んでいる民間団体から、妊娠期から就学前にかけての子育て家族への「切れ目ない」支援の阻害要因についての情報収集・聞き取りを皮切りとした。子育て支援サービスそのものはきめこまかく整備されつつある一方、利用者にその情報が十分に届きにくい、また、支援を必要とする利用者との接点が確保できず、子育てについての気がかりや心配ごとへの早期対応における課題を把握した。8 月にはフィンランドでの資料収集とネウボラ関係者への個別インタビューを実施した。
　11 月下旬から 12 月初旬にかけて企画した国内での国際シンポジウムは、ゲストスピーカーの海外共同研究者トゥオヴィ・ハクリネン博士（フィンランド国立保健福祉研究所・研究総括部長）が健康上の理由で来日延期となる状況下でも中止せず、代表者・高橋と研究協力者・渡辺久子氏（児童精神科医）、佐藤拓代氏（公衆衛生医）、毛受矩子氏（四天王寺大学教授）および母子保健推進会議と駐日フィンランド大使館などの協力によって予定通り大阪、岡山、東京で実施に至った。ネウボラ政策策定・政策評価における第一人者であるハクリネ博士の来日は、H28 年 3 月中旬に実現し、東京と大阪で国際シンポジウム（母子保健の専門職向けセミナーを含む）を開催できた。
　2 年目の研究活動は、研究の成果発表と最終年度に向けての研究協力者等との協議が中心である。H28 年 5 月に代表者・高橋は精神科医療の領域で近年注目されているフィンランド発祥の「オープンダイアローグ」に関するシンポジウムにコメンテーターとして参画した。ネウボラでの専門職と利用者（主に母子）との対話的な関係性について報告した。高橋は 7 月にソウル・梨花女子大学校での EASP（East Asian Social Policy research network）国際会議において研究成果の発表を行った（発表題目は「Politics of gender and child care : Japanese family as policy agenda」。8 月にはさらにフィンランドで現地インタビュー調査（特に父親とネウボラの関係）によって研究情報を収集した。9 月には国内の研究協力者たちとの協議を重ね 10 月下旬から 11 月初旬にかけて、高橋がフィンランドに渡航し、タンペレ大学でエイヤ・パーヴィライネン教授らとの研究協議を行い、来年度以降の共同研究の可能性について意見交換を行い、ヘルシンキで 2 日間にわたり開催される全国ネウボラ専門職（ネウボラ保健師）年次会合に参加し、ネウボラに関する最新の課題（医療民営化改革の動向とネウボラの位置付け、移民家族への支援など）について最新の研究情報を収集した。
　最終年度は総括として、代表者・高橋が H29 年 6 月に国際公共政策学会国際会議（国立シ

ンガポール大学)で研究成果を口頭発表した。この発表原稿はさらに加筆修正し査読付き学術論文として H30 年 1 月に出版した。また、子育て支援の多様なニーズに関連して、精神科医療において日本でも関心が高まっているオープンダイアローグの創始者２名（ヤーコ・セイックラ、ビルギッタ・アラカレ）の講演（8 月 20 日、東京大学安田講堂）において通訳を務め研究交流に参加した。9 月から 11 月にかけては全国 6 か所で実施された、厚生労働省の委託事業「子育て世代包括支援センター・マネジメント業務についての研修」（日本家族計画協会）での講師の一人として参加した。11 月には日本乳幼児精神保健学会 Four Winds 第 20 回全国学術集会シンポジウム「乳幼児の権利とは何か」においてパネリストの一人として、子どもの権利の視点からフィンランドのネウボラについて報告した。『チャイルドヘルス』、『教育と医学』、『外来小児科』などの専門誌の依頼に応え寄稿し、「切れ目ない支援」について、母子のみならず家族全体を視野に含め、子育て家族を中心とする支援の心理的な継続性に十分配慮することの意義について論考を発表した。H30 年 3 月にはフィンランドでの研究総括をトム・エーリク・アーンキル(フィンランド国立保健福祉研究所名誉教授)らと行い、子育て家族支援を含む対人支援に携わる専門職向けの研修教材の開発を含め、今後の研究の展開への展望を得ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）
①髙橋睦子、フィンランドの子育て家族支援「ネウボラ」の展開、外来小児科、査読無、21 巻 1 号、2018、45-50 頁

②髙橋睦子、フィンランドのネウボラに学ぶ、教育と医学、査読無、66 巻 3 号、2018、36-43 頁

③髙橋睦子、フィンランドの出産・子育て支援「ネウボラ」、チャイルドヘルス、査読無、21 巻 2 号、2018、34-37 頁

④髙橋睦子、子育て世代包括支援センターの理念とこれまでの歩み、母子保健情報誌、査読無、3 号、2018、8-11 頁

⑤Takahashi Mutsuko、Policy narratives in formation of comprehensive support system for parenting and childcare in Japan、*International Journal of Public and Private Perspectives on Healthcare, Culture, and the Environment*、査読有、Vol. 2 (2)、2018、22-32 頁
DOI: 10.4018/IJPPPHCE.2018010102

⑥髙橋睦子、フィンランドの子育て支援の改革とイノベーション、吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要、査読無、18 号、2017、45-47 頁

⑦髙橋睦子、フィンランドのネウボラ ―子育て家族にとって一貫性・整合性のある支援に向けて、国際文化研修、査読無、96 号、2017 年、6-11 頁

⑧髙橋睦子、欧米の子育て事情 ―フィンランドを中心に、児童心理（12 月号臨時増刊）、査読無、1033 号、2016、31-36 頁

⑨髙橋睦子、日本でのネウボラとオープンダイアローグの解釈 ―emic/etic の視座から、吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要、査読無、17 号、2016、25-27 頁

⑩髙橋睦子、フィンランド雑感、統合失調症の広場、査読無、8 号、2016、90-92 頁

⑪髙橋睦子、出産・子どもネウボラ ―切れ目ない支援を支える対話、月刊福祉、査読無、98 巻 8 号、2015、48-49 頁

⑫髙橋睦子、ネウボラとフィンランドの子育て支援、母子保健、査読無、673 号、2015、9 頁

〔学会発表〕（計 4 件）
①髙橋睦子、子どもと子育て家族を包み込む「地域の実家をめざして、日本の子どもの未来を考える会第２回シンポジウム基調講演、2018、2 月 10 日、東京・日本財団

②Takahashi Mutsuko、Policy narratives of formation of comprehensive support system for parenting and childcare in Japan、3rd International Conference on Public Policy、2017、6 月 30 日、国立シンガポール大学

③Takahashi Mutsuko、Politics of gender and child care: Japanese family as policy agenda、13th International Conference of EASP (East Asian Social Policy research network)、2016、7 月 1 日、韓国・梨花女子大学校

④髙橋睦子、北欧における地域社会の多文化共生 - フィンランドを中心に、多文化関係学会 第 14 回年次大会 学際シンポジウム、2015、11 月 16 日、岡山大学

〔図書〕（計 3 件）
①藤井ニエメラみどり、髙橋睦子、ペトリ・ニエメラ、メルビオ・ミカ、フィンランド　育ちと暮らしのダイアリー、2017、かもがわ出版、全 228 頁

②J.セイクッラ、T.E.アーンキル、髙橋睦子、竹端 寛、高木俊介、オープンダイアローグを実践する、2016、日本評論社、全 86 頁

③髙橋睦子、ネウボラ ―フィンランドの出産・子育て支援、2015、かもがわ出版、全 120 頁

〔産業財産権〕
無し
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
科研費を使用して開催した国際研究集会
（計 6 件）
①国際シンポジウム：妊娠期からの「ひとつながり」の子育て支援 - フィンランドのネウボラから学ぶ、2016 年 3 月 18 日、大阪市立大学文化交流センター

②国際シンポジウム・プレセミナー：ネウボラの実践、専門職の技量、2016 年 3 月 18 日、大阪市立大学文化交流センター

③国際シンポジウム：妊娠期からの「ひとつながり」の子育て支援 - フィンランドのネウボラから学ぶ、2016 年 3 月 17 日、東京都赤坂区民センター区民ホール

④国際シンポジウム：妊娠・出産・子育てにやさしい社会をつくろう - フィンランドのネウボラから学ぶ、2015 年 12 月 4 日、東京都港区男女平等参画センター「リーブラ」

⑤国際シンポジウム：妊娠・出産・子育てにやさしい社会をつくろう - フィンランドのネウボラから学ぶ、2015 年 12 月 1 日、岡山県立図書館多目的ホール

⑥国際シンポジウム：妊娠・出産・子育てにやさしい社会をつくろう - フィンランドのネウボラから学ぶ、2015 年 11 月 28 日、大阪市立総合医療センターさくらホール

６．研究組織
(1)研究代表者
髙橋 睦子（TAKAHASHI, Mutsuko）
吉備国際大学・保健医療福祉学部・教授
　研究者番号：50320437

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
メルビオ、ミカ（MERVIO, Mika）
吉備国際大学・外国語学部・教授
　研究者番号：00320440

(4)研究協力者
佐藤 拓代（SATO, Takuyo）
鑓溝 和子 （YARIMIZO, Kazuko）
毛受 矩子（MENJU, Noriko）
渡辺 久子 （WATANABE, Hisako）
トゥオヴィ・ハクリネン（Tuovi HAKULINEN）
エイヤ・パーヴィライネン
（Eija PAAVILAINEN）
トム・エーリク・アーンキル
（Tom Erik ARNKIL）